仮面ライダーBLACK ISに介入

ショウゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＩＳに介入

【Ｎコード】
Ｎ１５２７Ｑ

【作者名】
ショウゴ

【あらすじ】
初投稿です。立ち読みしたＩＳ（インフィニット・ストラトス）面白かったのでまだ途中までしか読んでないんですが思い切って自分の好きな仮面ライダーであるＢＬＡＣＫとコラボさせてしまいました。見苦しい出来上がりですが、見ていってやって下さい。

仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＩＳ（前書き）

主人公達の出会い

仮面ライダーBLACK　IS

とある場所にて

「ち、遅刻する～～」

彼の名前は織斑　一夏

この作品の主人公の一人である

彼は今入試会場に向かって全力で走っていた

「このまま行けばなんとか間に合う」

だが、彼は急ぐあまり周りをよく見ていなかった

キキーーーーー

「え？」

音のする方を振り向けば一台のトラックがこちらに突っ込んでくるではないか！

（ヤバイ、ぶつかる！）

彼は反射的に目を閉じて諦めかけてしまった

その時！！

ブォン！

ガシ！

「え？」

死の瞬間はいつまで経ってもやってこなかった

おそるおそる目を開けてみると、そこにはあるナイスガイがいた

「君、ケガはないかい？」

「は、はい。大丈夫です」

「それは良かった。それにしても、乱暴な運転だな。それにもうどこかへ行ってしまったみたいだな」

そう、一夏を助けたバイクに乗ったナイスガイこそもう一人の主人公南光太郎である

「あ、あの助けてくれてありがとうございます」

「いや、気にしないで困った時はお互い様さ。それよりその格好受験生なんじゃ？時間は大丈夫？」

時計を見てみるとかなりまずい時間になっていた

「や、やばい。急がないと」

その事実に一夏は青ざめ急いで向かおうとした

「待って」

その時光太郎が一夏を呼び止めた

「試験場まで送るよ」

「いいんですか？」

「もちろん、ただ道案内は頼むけどね」

「お願いします！」

「よし、行くぞ！」

ブォーーーン

「うお！」

一夏が後ろに乗った瞬間猛スピードで試験場にむかった

試験場前

「助かりました」

「気にしないで、それより試験頑張って！」

「はい！」

「それじゃ」

そのままバイクに乗って光太郎はどこかに行ってしまった

「カッコいい人だったな。おっと、急がないと」

こうして物語は幕を開けた

仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＩＳ（後書き）

どうやって光太郎が別世界に来てしまったのかを書こうと思います。

この世界について（前書き）

バトルホッパーの出し方が強引すぎた。そしてジャンさんのＢＬＡＣＫが面白過ぎる。

この世界について

「　・・・！こ、ここはいったいどこだ？」

光太郎は何もない広場で一人目を覚ました

「そうだ、僕は変な奴らに捕まって体をいじられたんだった。とりあえずここがどこか確認しないと」

そう言って立ち上がろうと近くにあった鉄パイプを掴んだ瞬間鉄パイプが引きちぎれてしまった！

「ど、どうなっているんだ！」

光太郎は決してひ弱ではないが、この力は明らかにおかしい。試しにジャンプしてみると物凄い高さまで跳ぶことができた。

「ぼ、僕の体はいったい？・・・！あの時体を改造されてしまったのか！」

あまりの出来事に呆然としてしまうが、その時自分と同じように体を改造されてしまった親友のことを思い出し辺りを探してみる。

「信彦ー！、いたら返事をしてくれーーー！」

しかしその声に応える者は誰もいなかった

「・・・く！、信彦は無事なんだろうか？」

しかし嘆いていても仕方がない、少しでも状況が良くなるよう行動

しようと決めた

ふと後ろを振り向くと、さっきまで何もなかったはずの場所に一台のバッタのようなバイクがあるではないか

「なんだこのバイクは？」

試しに動かしてみたら簡単に動いた。

「何か変な感じだ、まるで昔から使っているみたいだ。なぜか自分のバイクのような気がする。」

光太郎は悩んだが、この不思議な感じを信じ持っていくことにした

「まずは情報を集めないと」

とりあえず人がいる所目指して出発した

「よかった。お金は使えるみたいだ」

コンビニに着いた光太郎は新聞を買い、さっそく読んでみた。どうやら自分のいた世界とは全く違う世界に来てしまったようだ

「それにしても、この世界の女性は立場がすごく強いんだな。」

その通りである。この世界ではＩＳとよばれる特殊な兵器が文字どおり最強であり、それを扱えるのが女性だけなので、女尊男卑がどこの国も当たり前になっている。ちなみにこのＩＳは本来宇宙進出を目的とした、仮面ライダーで言えばスーパー１のような物なのだが、そちらの方は全く進んでいない。そして余りに強すぎるので軍用に使うのを禁止されており、格闘技やスポーツのような感覚で認知されている

「よし、少しはこの世界のことがわかったかな。次は衣食住をなんとかしないと。まあとりあえずもう少しこの辺りを見て回ってみるか」

そうして彼はバイクに跨り出発した。この後もう一人の主人公を助けることになるともしらずに。

この世界について（後書き）

これからどうやってＩＳ学園とからませようか悩み中。というか衣食住どうしよう。

女を守るのは男の役目（前書き）

gd gdな展開かも…

女を守るのは男の役目

光太郎は一夏を助けた後軽く聞き込みをしようとバイクを降り辺りを散策してみた。

「誰かいないかな～」

そんな時近くで声が聞こえた。しかし少し様子が変だ、なにやら言い争っているようだ。

「急いでいるんでどいてください！」

「いいじゃないか。俺達と遊ぼうぜｗｗ」

どうやら一人の女の子を複数の男がナンパしているようだ。しかもしつこい。

「あんた達みたいなやつらとなんか死んでもいや！」

「んだとこのアマ！！」

男の一人が逆上し拳を振り上げる。

（殴られる！）

そう思い目を閉じてしまった。

しかしいつまで経っても痛みはやってこなかった。

おそるおそる目を開けてみると殴ろうとした男の腕を一人の熱い魂を持った男が受け止めているのが見えた。

「小さな女の子相手に男が大勢でこんなことを・・・恥ずかしいと思わないのか！！」

「ひぃ！」

その一言でガラの悪い男達全員を追い払ってしまった。

「大丈夫？」

「は、はい！助けていただきありがとうございます！」

「気にしないで。じゃあ」

光太郎はそのまま去ろうとしたが、

「ま、待ってください。お礼がしたいんです。あ、私の名前は五反田蘭って言います。家は食堂なので是非奢らせてください！それでお名前は？」

「み、南光太郎です。」

あまりの勢いに名前を名乗ってしまった光太郎であった。

五反田家

「ただいま～」

「お、お邪魔します。」

「おう、お帰り、遅かったな。ん？後ろの人は？」

「ど、どうも。南光太郎です。」

「堅苦しくしないで！この人にしつこくナンパしてくる人達を追い払って貰って、そのお礼にここでご飯食べて行ってもらおうと思って。」

「ほぅ、最近の若いのにしてはなかなかやるじゃないか！俺は厳。そこの子の祖父だ。よし、ちょっと待ってろ、今美味いもん食わしてやるからな！」

「しかし、いいんですか？何処の馬の骨とも分からない男を招待するなんて？」

「こっちは客商売やってんだ、目を見りゃそいつがどんな奴か分かる。お前は悪い奴にはみえないな。だから気にすんな！」

何というかとてもパワフルな家族だ。

「できたぞ！」

「おお！」

そこには美味しそうな野菜炒めとカレイの煮込みがあった。

「すいません。ご馳走になって。」

「礼なんだ気にすんな！」
結局皆で食べるということになり五反田家のほとんどの人と知り合いになった。

「そうだぜ、妹を助けてもらったんだ遠慮すんなって。」

そう言う彼は五反田弾、蘭の兄である。

両親は今は生憎出掛けているらしくいないのだが、まあ皆さん元気なのでにぎやかそうだった。

食事が終わり一息ついたところで弾は質問をした。

「そういえば光太郎は何処から来たんだ？」

やはり来てしまったか、この質問が。しかし予想していたので返事は不自然にはならないよう気を付けながら心苦しいが少し嘘をつくことにした。

「実は以前の記憶がほとんどないんです。ですから本当は僕は悪人なのかもしれません。」

だが、厳は自信満々に言い放つ。

「さっきも言ったがお前の目は悪い奴の目じゃない。気にすることはない。」

「そうだよ。本当に悪い人なら私を助けてなんかくれないよ。だから気にしないで。」

光太郎は不覚にも感動してしまった。

「ありがとう・・・ございます。」

「と言うことはいくあてもないんだろう？どうだ？ここで働かないか？」

「それは助かりますが、しかしさすがに・・」

「ごしゃごしゃ言うな。よし、決定だ。」

決定になったらしい。

「とりあえずこれからよろしくな。」

「こちらこそよろしくお願いします！」

光太郎は与えられた部屋で寝る準備をしていた。そんな中先ほどついた嘘を思い出していた。実はあの嘘は少しだけ本当の所がある。それはどのようにしてあの場所に着いたのかということだ。

（記憶が混乱しているせいか思い出しそうで思い出せない。）

そんなこんなで寝る準備もできたので明日からの新しい生活に備えて寝る事にした。

そこには捕らえられている光太郎と信彦がいた。

（・・・・・！これは夢か？いや違う改造された時の記憶か！）

「お前にはキングストーンを埋め込み、生まれ変わってもらった。後は記憶を完全に消せば世紀王ブラックサンの誕生だ！！」

その時一人の男が乱入してきた。

「やめてくれ！約束が違うじゃないか。記憶は消さないはずだろう二人とも私の息子だ！」

「博士、彼らはもはやあなたの子供ではない。大人しくそこで見ていろ。」

「く！」

いきなり博士はゴルゴムに飛び掛かり記憶を消されるのを食い止めた。

（そうだ！記憶を完全に消される直前に父さんに助けられたんだ。

けど僕は父さんと信彦二人を助けることが出来ず逃げる事しか出来なかった。その途中であのバイクを見つけたんだ。）

今になってようやく思い出し自分がブラックサンなるバッタのよう

な怪物にされていたことを思い出した。

（だけど、この力は人類を滅ぼすためなんかに使わない。友を家族をそして目の前で苦しんでいる人達を救うために使う！！）

そう決心した光太郎であった。

（それに僕がこの世界に来ているなら信彦や父さんも来ているかもしれない。そしてゴルゴムと呼ばれていた奴等も。）

光太郎はこの世界で今まで見たことも聞いたこともない壮絶な戦いに巻き込まれていく予感がした。

そう、見たことも聞いたこともない戦いに…

女を守るのは男の役目（後書き）

そろそろＢＬＡＣＫに変身します。

その名は仮面ライダーＢＬＡＣＫ！！（前書き）

バトルシーン難しい（´д`）

その名は仮面ライダーＢＬＡＣＫ！！

五反田家に来てからそれなりの時間が経った。（どれくらい経ったか明記すると後で面倒なことになりそうのでぼかしておきます。（´д`））そして光太郎もこの世界に馴染み始め、情報も集めていた。最近知ったことは女性しか扱えないＩＳを扱える男が現れたこと。その男が１００％女しかいないＩＳ学園に入れられたこと。その男が弾君や蘭ちゃんの幼なじみだということくらいだ。

そんな光太郎だったが昼も過ぎた頃で暇を貰ってしまい、暇を持て余していた。

「この辺りに何か変わったことがないか探してみるか。」

その言葉の通り彼は毎日ゴルゴムのことについて調べ回っていた。しかし、こちらの世界に来てからゴルゴムの手掛かりが何一つ見つかっていないのである。

今日はいつもより遠くまで探してみたが、やはり収穫はゼロであった。

「ふぅ。やはりそう簡単には見つからないか。ん？ここは確かＩＳ学園。捜し物に夢中になって随分遠くまで来てしまったようだ。」

ふとそんな事を呟いた光太郎だったが、不意に空から嫌な気配を感

じた。

そう思い光太郎が上を見た瞬間！

スドォォォン！！！

とてつもない爆音がＩＳ学園から響いてきた。

しかもそれは周りの雰囲気から察するに非常事態のようだ。

それなのに中からは誰も避難して来ない。

「まさか閉じ込められているのか。…く！こうなったら僕も中に・・・・扉がロックされている！」

中からは先ほどの嫌な気配の持ち主が暴れ回っているのが分かる。

「このままでは中にいる子供達の命が危ない！・・・そうだ！この力を使えばなんとかなるかもしれない。・・・けどそれは自分が人間ではないと完全に認めてしまう事に・・・」

光太郎は迷っていた。それも仕方のないことだろう、誰しも自分が既に人間ではないという事を簡単に認める事など出来ない。

しかし光太郎は例え自分が人間ではないと認める事になるとしても、目の前で苦しんでいる人達を見捨てることなど出来はしなかった。

「・・・よし！」

そう言って精神を集中させ、両拳を力強く握りしめ、気合いと共に力を解放させ、叫んだ！

「・・・変身！！」

一夏ＳＩＤＥ

一夏は全身を装甲で覆われた異形なＩＳを幼なじみであり代表候補生である鈴と共に対峙していた。

（こいつはいったい何者なんだ！ＩＳはシールドで攻撃を防ぐからここまで体を装甲で覆う必要は無いはずだ。それにこいつからは人の気配みたいなのがしない。まるでロボットみたいだ。）

もう何度も攻撃を回避されていて、残りエネルギーから考えて後一回しかチャンスが残されていない以上危険だが一夏はある作戦を実行する。

「鈴！俺が合図したらあいつに向かって衝撃砲を最大出力で撃ってくれ。」

「？当たらないわよ。」

「いいんだ、当てる必要はない。じゃあ、行く・・・」
突撃しようとした瞬間、スピーカーから箒の声が響いた。
「一夏ぁっ！男なら勝て！！」
そう叫ぶ箒に敵ＩＳが興味を持ったようだ。箒の方をじっと見ている。
「く！」
今から言っても間に合わない。なら行くしかない！！
突撃体制になり加速する。そして敵ＩＳに視線を向けると、腕を箒に向け砲撃しようとしているのが見えた。
「鈴、頼む！」
「わ、わかったわよ！」
衝撃砲を最大出力で放つためしっかりと構える鈴。
俺はその射線上に躍り出る。
「！ちょっと、どきなさいよ！直撃するわよ！」
「いいから撃て！」
「ああもうっ！どうなっても知らないわよ！」

俺は瞬間加速を起動させる。瞬間加速はエネルギーを取り込み圧縮して放出し一気に加速させることであり、それは外部からのエネルギーでもいい。そして、瞬間加速の速度は取り込んだエネルギーに比例する。
衝撃砲のエネルギーを使えば敵は避けられない。

ドンッ！

背中に衝撃砲が当たったのを感じる。体がきしみながらも俺は――――加速した。

「――オオオ！」

雪片弐型が力強い光を放つ。

（この一撃で客席とを遮断しているシールドも破壊する！）

本来ならばこの作戦は上手くいくはずだった。

しかし、彼は不運だった。

「な！」

加速のエネルギーに相手が僅かだが反応し、予定より深く斬ってしまい、遮断シールドまで届かなかった。

（そんな！）

敵の右腕を切断し、ＰＩＣを傷つけることができ、遮断シールドの

すぐ傍まで弾き飛ばせたが遮断シールドは無傷だった。

（エネルギーがもう尽きた。）

そう思っていた一夏に敵ＩＳが反撃で残った左腕で殴ってきた。しかもゼロ距離でビームを放つつもりらしい。

「「「一夏っ（さんっ）！」」」

箒と鈴とセシリアが叫ぶ。

（やられる！）

そう思ったが、一夏は目を背けなかった。

それはただの意地であったが一夏は決して目を閉じなかった。

ゆえに

今目の前で起きたことを見ることができた。

それはとても信じることが出来ないような出来事だった。

なんせ

一人の蒸気を身に纏った黒い何者かが遮断シールドを破壊し、そのまま敵ＩＳを吹き飛ばしたのだから！

そして、その何者かが雄々しく名乗りを上げる。

「仮面ライダー・・・ＢＬＡＣＫ！！」

セシリアＳＩＤＥ

「あぁ！」

（本来なら敵のシールドを破壊しつつ遮断シールドも破壊し、破壊したシールドの隙間からわたくしが敵ＩＳを破壊する予定でしたのに！）

その作戦が上手くいかなかった以上こちらからは手出し出来ない。

例え手を伸ばせば届きそうでもこのシールドがある限り手は届かない。

そして敵ＩＳが反撃してきた時自分の無力さを呪いながら目の前の愛する人の名前を叫んでいた。

「一夏さん！」

それは他の二人も同じなのだろう。声が聞こえないがそう思った。

もう駄目だと思ったその時。

「トォ！」

誰かの声が聞こえた。

聞こえた方を見ると蒸気を身に纏った黒いバッタのような何者かが敵ＩＳに向かって飛び掛かっているではないか！

しかし、その前にはシールドが！

「危ない！」

そう言った直後信じられないものを見た。

「ライダーパンチ！！」

シールドを素手でしかも一撃で砕き敵ＩＳを吹き飛ばしたのだから！

（い、一体何者なんですの？）

そう思っていたセシリアの視線の先でバッタのような何者かがこう叫んだ。

「仮面ライダー・・・ＢＬＡＣＫ！」

ＢＬＡＣＫＳＩＤＥ

「君。怪我は無いかい？」

ＢＬＡＣＫはまず危なかった少年の安否を確認した。

「え？あ、だ、大丈夫です。」

「そうか。よかった。」

ＢＬＡＣＫは間に合ったことにひとまず安心した。

「君の名前は何と言うんだ？」

「織斑一夏です。」

「では一夏君。あそこにいる女の子を連れて安全な場所に避難するんだ。」

「え？そんな！俺も戦います！」

だがＢＬＡＣＫは首を横に振った。

「女の子を守るのは男の役目だろう？ここは私が引き受けた！だからあの子達を頼む！」

「！、はい！」

そう言って一夏は鈴の方へ向かっていった。

それを見届けたＢＬＡＣＫはＩＳに向き直りあることを考えていた。

（まさかあんなに簡単にシールドを突破出来るなんて！）

そうである。いくら仮面ライダーと言えどあのシールドを突破するのにはかなり苦戦するのだが、ＢＬＡＣＫに埋め込まれたキングストーンの加護により、ＢＬＡＣＫはシールドに対して無類の強さを得ていたのだ！

（さて、ＩＳと戦うのは初めてだ。まずは敵を知る！）

「マルチ・アイ！」

ＢＬＡＣＫはマルチ・アイによって敵の情報を得た。

（ＩＳの中は機械？ＩＳは人がいなければ使えないのではないのか？）

そんな疑問が浮かんだが今は脇に置いとくとした。

敵がこちらに向かって来たからだ。

「いくぞ！」

ＢＬＡＣＫも駆け出す。どうやら敵は浮遊することは出来るがＰＩＣが傷付き飛ぶことが出来なくなったようだ。

残った左腕でビームを撃ってくるが、ＢＬＡＣＫは弾道を見切り、避け、一気に懐に飛び込み、

「フン！ハァ！」

連続でパンチを叩き込んだ！

このまま攻め込もうとしたが、敵がコマのように回転しながらビームを乱射してきたので一度距離を取った。

（下手に飛び込めばビームの餌食になってしまう。それにあの回転では下手な攻撃では弾かれてしまう。いったいどうすればいいんだ。・・・そうだ！これならば！）

ＢＬＡＣＫはある作戦を思い付き敵に向かっていった。

牽制程度のビームを避けながら近づき敵が回り始めた瞬間、

「トォ！」

相手の真上に跳んだ！

ここからの攻撃なら回転の影響をほとんど受けない上に、相手が攻撃を当てるにも腕を上に向ける必要があるため、僅かだが時間がかかる。

そしてＢＬＡＣＫは右足に力を集中させ、気合いと共に必殺の一撃を放った！

「ライダーキック！！」

右足は赤く輝き、敵の頭部を粉々に砕いた！

「やったぁ！」

そう言いながらこちらに駆けてくる一夏がいた。

だが次の瞬間その目が驚愕に見開き、

「危ない！」と叫んだ。

ＢＬＡＣＫが振り向くと敵ＩＳが砲真がいかれても構わない！と言わんばかりの明らかに限界を越えた出力のビームを放ってきた！！

ＢＬＡＣＫは避けられない。自分の後ろには一夏君がいる！この場で何とかするしかない！

その時何処からか謎の声が聞こえてきた！

（南光太郎よ。限界まで力を引き出すのだ。）

誰だかは分からないが今は自分の力を信じるしかない！

そう覚悟を決め、腰のベルトに手を添え自分の限界を一気に引き出し、放った！

「キングストーンフラッシュ！！」

相手の放ったビームは、より速く、より強力になって相手に跳ね返った！

ボゴォォォン！！！

今度こそ敵ＩＳは完全に粉々になった。

そしてＢＬＡＣＫは全員無事なことを確認し終えた後何も言わずに何処かへと去っていった。

「仮面ライダー・・・ＢＬＡＣＫ・・・か。」

一夏は彼の去っていった方向を見ながらそう呟いた。

仮面ライダーＢＬＡＣＫの雄姿を胸に刻み込んで。

その名は仮面ライダーＢＬＡＣＫ！！（後書き）

次回はラウラ・ボーデヴィッヒとシャルロット・デュノア登場

人の心を踏み躙るＶＴＳを打ち砕け！（前書き）

戦闘シーン難し過ぎ

人の心を踏み躙るＶＴＳを打ち砕け！

今日は皆大好き休日！けどそんなの関係ねぇ！と言わんばかりにお客が朝からここ五反田食堂に詰め掛けてきた。

「おやっさん！定食３つ追加入りました！」

「おう！野菜炒めとカレイができた！すぐに運べぃ！」

まさにうれしい悲鳴というやつだ。この忙しさはお昼を少し過ぎるまで続いた。

人が少なくなったところで弾君達が食事を取りに来た。

「これを家のやつらの所に持って行ってやってくれ。」

「はい。」

どうやら友達も来ているようだ。

「おまたせ～。」

「お、サンキュ～。」

「ありがとう。」

いつの間にか着替えたらしくかなり気合の入った格好をしている蘭ちゃん。はて、いったいどうしたのだろうか？

「ありがとうございます、って、あなたはあの時の！」

「え？」

おそらく弾君の友達だろう少年がこちらを見て驚いた顔になっていた。

よく顔を確認するとトラックに轢かれそうになっていた少年だった。そしてＩＳ学園で仮面ライダーとして会ったことのある少年でもあった。

「ああ、あの時の。試験には間に合った？」

「はい！あの時は助けてもらってありがとうございました！」

「何？おまえら知り合い？」

「ああ。トラックに轢かれそうなところを助けてもらったんだ。俺の命の恩人さ！」

「いやぁ。たいしたことはしていないよ。」

感謝されるのは悪くないが、こうまで持ち上げられると光太郎としても照れてしまう。

「そういえば自己紹介がまだでした。俺の名前は織斑一夏。ＩＳ学園に通っています。」

「僕の名前は南光太郎。ここで働かせてもらってる。それにしてもＩＳ学園？ということは世界でただ一人ＩＳを使える男性って君の

ことか！すごいじゃないか！」

「いやぁ／／／そんなことより、実はこの前学園ですごい人にあったんだよ。」

照れてしまったのか、話をそらし、弾君達に向き直った。

「すごい人？女か！？」

「いやたぶん違うと思う。」

「たぶんって分からないんですか？」

「うん。仮面ライダーＢＬＡＣＫって名乗ってた。」

「！！」

「カメンライダー？なんだそりゃ？」

「聞いたことがないですね。どんな人だったんですか？」

「仮面にボディーアーマーみたいなのを着た人で、パンチでＩＳにも使われてるシールドを簡単に壊したんだ！すげぇかっこよかったぜ！」

「すごいひとですね！」

「でも男みたいなんだろ。なら興味ねぇや。」

と弾君は興味を無くしたらしく食事にしようと皆を促す。

「じゃあ僕はこれで。」

そう言って光太郎はその場を離れた。

二人の主人公達の自己紹介が終わってからそれなりの日にちがたった。（矛盾点がないように日数はまたぼかしておきます）

光太郎はもしゴルゴムのようなやつらが何かするとしたら、必ずＩＳを利用すると考え最近はＩＳ学園の近くを調べていた。

「ふむ。今日も何事も起きなかったか。僕だけがこの世界に来てしまったのかもしれないな。もしそうだとしたら早く元の世界へと帰らないと！けどこの世界で起きていることも無視できない。」

光太郎はあの正体不明のＩＳのことを思い出していた。

（ＩＳは空を飛ぶことができる。僕のバトル・ホッパーである程度までは近づくことは出来るが、本来空を飛ぶ機能はない以上限界がある。何か対策を練らないといけないかもしれない！）

そんなことを考えながら戻ろうとする光太郎だが、急に学園の方からとてつもなく嫌な気配が発生してきた！

「な、なんなんだ？このいやな感じは？」

とにかく光太郎は行ってみることにして、学園にこっそりと侵入した。

一夏ＳＩＤＥ

（ラウラはいったいどうしちまったんだ！？）

目の前にはつい先ほどまで対戦していたラウラがいた。

いや、すでにだった者になっている。

なぜならその全身は彼女のＩＳが粘土のように溶け、全身に張り付き全く別の姿に変わってしまったからである！

（あんな変化はありえない！どんなＩＳだってあんなにも姿形が変わることはない！それについさっきまでのラウラとは気配がまるで違う！）

一夏は気配を読むことが出来るような人間ではなかったが、そんな一夏でも分かるほど彼女から発せられる気配は異様だった。

（シャルルの方はなんとか無事みたいだな。）

自分のパートナーである少女はラウラが変身（すでに変形の域を超えている）した時に発生した電撃により弾き飛ばされてしまったので心配していたが、無事だと分かり目の前のことに集中する。

（あいつの持っている武器はおそらく雪片で間違いない！）

そう。ラウラは今ひとつしか武器を持っていないが、その武器こそ一夏の姉千冬がそれ一本で全国制覇した時に使っていた自分と同じ能力を持つ雪片弐型の原型、雪片である！

そしてラウラのような者はこちらを向き、一気に攻めてきた！

（まずい！今エネルギーがほとんどない！食らったら本当に死ぬ！）

なんとか避けようとする一夏。しかし相手の動きは今までより圧倒的に速く鋭い。今の一夏ではまず避けられないはずだった。

しかし、

「く！」

一夏はＩＳに緊急後退の指示を出し何とか直撃を避けた。

今の緊急後退で完全にエネルギーが尽きたらしく一夏のＩＳは光の粒子となり待機モードになってしまった。

「このやろう！」

しかし一夏は生身で向かって行こうとした。

「待て！」

そんな無謀な行為を箒が止めようとした。

「ＩＳもなしにどうするつもりだ！」

「邪魔をするな！邪魔をするならお前もぶっとば・・・」

「この馬鹿者！！」

バキ！！

「ぐっ！」

一夏は思いっきり殴られた。

「少しは頭を冷やせ殺されるだけだぞ。それに何をそんなに怒っている。」

「あの動きは千冬姉ぇの動きだ。」

「え？」

箒はいまいち理解が出来なかった。

「どうやったかは分かんねぇけど、あの動きは間違いなく千冬姉ぇの動きだった！だから最後の一撃が避けれた。」

「そういうことか。」

「あれは千冬姉を侮辱している！だからぶん殴ってやる！」

「だが一夏。お前がやらなくともこの事態は治まりそうだぞ。」

周りでは教師達が慌しく何かの準備をしているようだ。

おそらくＩＳの準備だろう。

箒の言う通りわざわざ自分が行かなくともこの事態は治まるだろう。

しかし、

「違うぞ箒。俺はあいつをぶん殴らないと気が済まないんだ。俺がやりたいからやるんだ！」

「しかしＩＳのエネルギーはすでに尽きてしまったお前に何ができる。」

「それは・・・」

一夏は考え込んでしまった。

すると、

「僕のＩＳのエネルギーを白式に送れば何とかなるよ。」

そうシャルルが言った。

「動いても大丈夫か？」

「大丈夫！それより約束して。必ず勝つって！」

「ああ！ここまで大口を叩いたんだ。決めなきゃ男じゃねぇ！」

「じゃあもし負けたら明日一日女の子の格好ですごしてね！」

「お、おお！いいぜ！絶対に勝つからな！」

シャルルのおかげで入りすぎていた力が抜けたのが分かった。

「じゃあ早速・・・と言いたいけど。」

そう言うとシャルルはラウラだった者の方を見た。

どうやらシャルルを敵と見なし攻撃してくるようだ！

「このままじゃエネルギーを送るどころかやられてしまうかもしれない！」

「どうすれば！」

敵が屈みこちらに突っ込んで来ようとしたその時！

「トァ！」

何者かがその目の前に立ち塞がった。

その者の名は

「仮面ライダー・・・ＢＬＡＣＫ！！」

ＢＬＡＣＫＳＩＤＥ

ＢＬＡＣＫは目の前の者が人間なのかそうでないのか分からなかった。

「おまえは何者だ！？」

しかし敵は何も答えない。

返事の代わりにと居合い切りの構えを取った。

「ならば行く「待ってください！」！」

振り向くと一夏がこう言った。

「あいつはＩＳに取り込まれてしまったみたいなんです。俺はあいつをあの中から引きずり出して一発ぶん殴ってやりたい。でもそのためには時間が必要なんです！ですからすごい失礼なことだと分かっていますが、時間稼ぎをお願いしたいんです！」

そう言って彼は頭を下げた。

「しかし危険すぎる！」

そう言いＢＬＡＣＫは断ろうとしたが、

「私からもお願いします！」

「一夏のことを信じてやって下さい！」

二人の少女までもが頭を下げてきた。

ＢＬＡＣＫは敵を警戒しながら考えた。
敵はどうやら彼らの知り合いのようで、見ているだけで悲しくなってくる雰囲気を醸し出していた。
おそらく自分が倒したとしても彼女の心までは救うことは出来ないだろう。
ならば、
「分かった。君達を信じよう。」
「！」
一斉に顔を上げた。
「ただし必ず生き抜くこと。彼女を人殺しにさせないためにも。」
そうＢＬＡＣＫは一夏の目を見ながら言った。
一夏はＢＬＡＣＫの赤い目をしっかりと見つめ返しながら答えた。
「はい。」
大きくはないが、はっきりとそう言った。
「よし！なら時間稼ぎは任せろ！」
そして、ＢＬＡＣＫは敵に向かっていった。
それに敵も反応し、居合い切りの体勢を崩さないまま突っ込んでき

た！

シャッ！

敵はいきなりＢＬＡＣＫの首を跳ね飛ばそうとしてきた！

しかし、

「フッ！」

ＢＬＡＣＫは持ち前の超反応で敵の攻撃を避け、その隙を突いて相手の頭を掴み、地面に肩から転がり、その勢いを利用して投げ飛ばした！

（なんて鋭い太刀筋なんだ！だがどこか機械めいた動きだ。まるで誰かの動きの真似をしているようだ。）

だがあの剣の切れ味は本物である。下手に受け止めればＢＬＡＣＫと言えど大きなダメージを受けるだろう。

（ここはこちらも刀で迎え撃つ！）

ＢＬＡＣＫは手刀で迎え撃った。

「ライダーチョップ！」

敵の刀を真正面から弾き返し体勢を崩させる。

「今だ！トォ！」

その隙を突きＢＬＡＣＫは敵を端の方まで吹き飛ばした！

そして、

「後は任せるぞ！一夏君！」

「はい！」

一夏のエネルギー補給が終わった。それでも、片腕と武器しか出せないほどわずかにしかエネルギーが残っていないようだ。おそらく一撃に賭けるしかないだろう。失敗すれば死んでしまうかもしれない。

それでも一夏は前を向いていた。

一夏ＳＩＤＥ

（この一撃で決める！）

一夏は姉である千冬と幼馴染である箒の動きを思い出していた。

（刀は力ではなく、刀自身の重さで振る！決して気持ちで負けないこと！）

そして、二人の動きを自分の中で合わせ、混じわらせ、自分の動きに昇華させていく！

「行くぞ。この・・・偽者野郎！！」

敵も恐るべき速度で飛び込んできて、鋭い切り込みを見せてきた。

しかし、そこに人の意思がなければ、意味はなかった。

「でりゃあ！」

一夏の一太刀は敵の偽雪片を折り、ＩＳをも切り裂いてラウラを救い出した。

その時のラウラの表情は泣いている様に一夏には見えた。

「殴るのは勘弁してやるよ。」

一夏はそう呟いた。

「終わったか。」

見事一夏の一太刀が少女の心にまで届いたことを感じたＢＬＡＣＫは安心してその場を離れようとした。

しかし、

「止まれ。」

そう警告したのは武器の刀だけ持った千冬だった。その後ろにはＩＳを装備した山田先生がいた。

「千冬姉ぇ、どういうことだよ？」

まず最初に一夏が突っかかった。

「織斑先生と呼べ！確かに二度もうちの生徒達を救ってくれた事には感謝しているし、そこの愚弟の我侭のためにお膳立てしてくれたことにも礼を言おう。」

「だったら！」

「しかし！だからといって顔を隠した不法侵入者を見逃すことはできん！」

一夏の言葉を遮る様に千冬が言い放つ。

「それでも「いいんだ。」仮面ライダー！？」

それでも尚食い下がろうとする一夏をＢＬＡＣＫは止めた。

「君のお姉さんにも立場がある。あまり私なんかのために無茶を言ってはいけないよ。」

そうＢＬＡＣＫが言ってしまえば、一夏からは何も言えなくなってしまった。

「だが私も捕まるわけにはいけない！押し通らせてもらう！」

そう言いＢＬＡＣＫは出口を塞いでる二人の方に駆け出す。

（彼女たちには何も非はない。怪我をさせずに逃げ切ってみせる！）

そう考えていたＢＬＡＣＫだったが千冬がいきなり突っ込んで来た！

「ふっ！」

その太刀筋は想像以上に鋭いものだった！

「ぐぅ！」

これにはライダーも後退せざるを得なかった。

しかし、

「えい！」

と可愛らしい掛け声が上から聞こえた。

「く！」

ＢＬＡＣＫはすぐさま防御体勢をとった。

次の瞬間嵐の様な弾丸が降り注いだ！

その中にグレネードも交じっているのを見てすぐさまその場を離れるＢＬＡＣＫ。

避けた一瞬後にグレネードは爆発した！

「トォ！」

ＢＬＡＣＫもその爆風を利用し、上空にいるＩＳに向かって飛んだ。
しかし、ＩＳはさらに空高く飛び、逆に反撃をしてきた！
「ぐぁ！」
ＢＬＡＣＫは手痛い反撃を食らってしまい地面に叩き付けられてしまった！
その隙を逃すような千冬ではなく、容赦のない猛攻撃にさらされてしまう！
（くぅ！いったいどうすればいいんだ！？）
「はぁ！」
「トァ！」
千冬の一太刀を手刀で押し戻すＢＬＡＣＫだったが上空からの集中砲火にさらされていては、なんとか避けるということを繰り返していた。
（このままでは。空を飛ぶか、一気に跳び上がり、あの空にいる人を何とかしないと！・・・そうだ！）
その時ＢＬＡＣＫには共に戦ってくれる相棒のことを思い出し、その者の名を呼んだ！
「バトルホッパー！！」

すると待機させていた相棒、バトル・ホッパーが駆けつけてくれた！

「な、なんだ！？」

「バッタ？それともバイクですか！？」

「トォ！」

ＢＬＡＣＫは二人が驚いている間にバトル・ホッパーに乗り込んだ。

「！逃がさん！」

逃がさないように出口までの道を塞ぐように立ちふさがるように、
それを援護するように移動する二人。

（先ずはＩＳを叩く！）

ＢＬＡＣＫはバトル・ホッパーのスピードを上げる！

そして、

「な、なにぃ！？」

何と、シールドを利用し、ほぼ垂直なシールドの道を駆け上がって
行くではないか！

さらに、

「行けぇ！」

その勢いのまま空中に飛び出し、ＩＳに向かって行った！

「っ！」

驚いていた山田先生だったが、すぐに反応し、また上空に避け、反撃しようとした。

だが、

「まだだ！トァ！」

ＢＬＡＣＫは高速で回転を続けるバトル・ホッパーの前輪に足を掛け、ものすごい速度で跳び上がり、一瞬で山田先生を追い抜いた。

「ライダーチョップ！！」

「ええ！？」

そして、山田先生が持つ全ての銃器を両断した。

「ふっ！」

地面に着地すると共に千冬が右肩目がけて鋭い一撃を放ったが、

「ヌン！」

その一撃を見切り白刃どりで受け止め、

「フン！」

「なに！？」

刀を砕いた！

「バトルホッパー！」

そして、バイクに跨り猛スピードで走り去っていってしまった。

「なんて奴だ。」

「す、凄過ぎですね。」

彼の空を飛べないという弱点をバイクで補い、こちらに怪我を負わせる事無く逃げ切るという離れ業を成し遂げた謎の男、仮面ライダーＢＬＡＣＫなる者に二人は改めて興味を持たされた。

人の心を踏み躙るＶＴＳを打ち砕け！（後書き）

ロードセクター！！出るよ。

新たな相棒ロードセクター！！（前書き）

久しぶりの執筆！自分でも何書きたかったか忘れてる～

新たな相棒ロードセクター！！

前回の事件から数日が経った。その時光太郎はあることを考えていた。

（確かにこの前は空中にいるＩＳに上手く攻撃が当てられたが、もっと上空に行かれたら今のままでは手出しすることが出来ない。）

何とか少しの間でいいので空を飛ぶ方法は無いものかと考えながら歩いていた。

しばらく歩いていると、人通りが全く無くなり、ふとかなり遠くからバイクの音が聞こえてきた。

「なんだ？こんな場所でバイクなんて。」

気になった光太郎は音の聞こえた方向に向かった。

「これは！」

光太郎が見たのは手製のサーキットであった。

そこでバイクに乗っている人がいたが、パワーが凄過ぎるのか、バイクに振り回されているように見えた。

「何というパワーだ！」

光太郎は驚いていた。空すらも駆けることが出来るのではないかと

思わされるほどすさまじい存在感を発していた！

「いったい誰があのマシンを作ったんだ？」

「私の父です。」

後ろを振り向くとつい先ほどまでバイクに乗っていた男が立っていた。

「あなたは？」

「私は大門明。このマシン、ロードセクターを作った大門洋一の息子です。と言っても私は科学者ではありませんが。」

「あなたは何をなさっていたんですか？」

そう光太郎が聞くと、彼は渋い顔をしながら教えてくれた。

「ロードセクターを作った私の父はこの前殺されてしまいました。」

「な、何だって！」

いきなり穏やかでない話が飛び出してきた。

「父は優れた科学者であったがため、ＩＳに対抗できるよう空を駆けることすら出来るようなバイクを作るよう脅され、このロードセクターを開発させられてしまった。だが、ロードセクターを引き渡すことだけは拒み、私に託しました。」

「そうだったんですか。」

光太郎は考えた。いったい誰がこんなひどいことをしたのかを。

「私はこのロードセクターを使ってこれを悪用しようとした奴等に復讐しようと考えました。しかし、私はプロのレーサーですがどうしても乗りこなすことができない！」

「僕に試させてください！」

「すまないが、見ず知らずあなたを信用することは出来ません。だいたいあなたには何の関係もないこと。なぜこのロードセクターを必要とするのですか？」

光太郎は自分のことを説明するべきか考えた。

（ここで嘘をついても信用してくれないだろう。それに嘘をつくのは好きじゃない。）

「僕の友人はゴルゴムと言う奴等に連れ去られてしまったんです。そいつらがいつＩＳを使って悪さをしてくるか分かりません。それに対抗するためにもどうしても空を飛ぶことが必要なんです。僕自身も体を改造されてしまい、もう普通の人間ではありません。ですが、この力は自分の信じる正義のため使いたいんです。どうか僕を信じてはくれませんか？」

そう光太郎が自身の目的を偽らずに告げると、大門さんはこの言葉に嘘はないと考えたようで、考えを変えてくれた。

「分かりました。貴方の事を信用します。」

「では、「ただし」！」

「いくら貴方の事を信用してもこのロードセクターをまともに動かせないようでは意味がない。なので、私の目の前で私が安心して任せられる位ロードセクターを完璧に操ってみて下さい。」

そう条件を突き付けられた光太郎だが、

「分かりました。貴方の期待に応えてみせます。」

そう言い光太郎は力を解き放つため集中した。

「…変…身！！」

「おお！」

光太郎が仮面ライダーＢＬＡＣＫに変身したのを見て大門は驚きを隠せなかった。何者にも染める事の出来ない漆黒の体を持ち、その身に宿った魂は太陽のように熱く燃えたぎっている。そんな事を感じさせられた。

「行くぞ！」

ＢＬＡＣＫは、ロードセクターに跨りアクセルを吹かした。

「グゥ…！」

余りの力強さにＢＬＡＣＫは僅かに呻いてしまったが、すぐに持ち直し、さらにスピードを上げた。

（凄いパワーだ！バトル・ホッパーですらここまでのスピードを出すことは出来ないのではないか！）

ロードセクターの凄さに感銘を受けながらも、自分ではまだ半分の力も出せていない事を理解しているＢＬＡＣＫは、未だ隠されている力を引き出そうとさらにロードセクターに集中した。

（確かに凄い。とても初めてロードセクターに乗った者には思えない。しかし、まだロードセクターには先がある。それを引き出すことが出来るかがＩＳと互角に戦えるかどうかの分かれ目だ！）

大門はこれからが勝負だ。と考え行く末を見守った。

「く…！」

ＢＬＡＣＫは地上での動きは徐々に上達してきたが、空中へと駈け出す事がなかなか上手くいかなかった。

（バイクに乗っているのとは全く感覚が違う！）

空を駆ける事ができるロードセクターの感覚は普通のバイクとは全く違うため、さしものＢＬＡＣＫといえど簡単にはいかない。

だがその時ＢＬＡＣＫはあることを思い出していた。それは、バトルホッパーで空を駆けた時の事だった。

（あの時は自分とバトルホッパーが一体と成って、未知への恐怖に打ち勝ち、空を駆けたんだった。あの時の感覚を思い出すんだ！ロードセクターと一つになるんだ！相棒を信じる事すら出来なくては、

あの鋼鉄の鳥には届かない！）

ＢＬＡＣＫがロードセクターを相棒として認め、心から相棒の力を引き出したいと思ったその時不思議な事が起こった。

「こ、これは！」

ロードセクターは今までの限界スピードを越え、さらにスピードを上げて行く事で今までのバランスの悪さが嘘のように機体が安定し始めた。

「これなら・・・行ける！」

ＢＬＡＣＫはロードセクターと共に新たな境地に達した。ＩＳと渡り合うための境地に！

「行くぞ！ロードセクター！！」

フルスピードを出したその時、ロードセクターは上部を閉じ、前方にシールドを展開し、空に道が在るかのように空に向かって突き進んで行くではないか！！

「や、やった！やったぞ！」

「お見事です。光太郎さん。」

「大門さん。」

「それが理論上存在した、ＩＳと互角に戦えるロードセクターの真の力、アタックシールドです。」

「アタックシールド・・・。」

「はい。そして、それを引き出せたあなたにならロードセクターを任せられるます。この力を正義のために使って下さい。」

「もちろんです！！全てが終わるまでこの力を借りさせていただきます。」

そう言ってＢＬＡＣＫは去っていった。

「あなたの友達の無事を祈っています。」

新たな相棒ロードセクター！！（後書き）

津波酷すぎる。まあ、何とかなりましたけどね。

新たなＩＳ紅椿！迫る福音！そして・・・（前書き）

最後に少しだけ奴が出ます。

新たなＩＳ紅椿！迫る福音！そして・・・

五反田食堂での仕事が少し早めに終わり、ドライブへと洒落こんでいた光太郎。

「ふぅっ。」

一息入れている時に、ふと元の世界の事を思い出していた。

（皆は元気かな？ゴルゴムが暴れ回っていなければいいんだけど。・・・信彦・・・。）

安否が分からない自分の友であり兄弟でもある信彦の無事を祈っていた、その時！

「・・・っ！？」

異様なまでの殺気を感じ取り辺りを見回す。

（いったい何者なんだ！？・・・あっちからか！）

とても見逃せる気配では無く、その正体を確かめるべく光太郎は気配のする方へとバイクを走らせた。

「・・・変・・・身！！」

その力を解放して

一夏ＳＩＤＥ

「「「「「一夏（さん）！」」」」」

（何とか間に合ったか。危うく寝過ごすところだったぜ。）

俺は一度福音に敗れて意識を失い、目が覚めた後、皆が福音に挑んでいる事を知り急いで来た。後少しで箒がやられそうだったがギリギリセーフだったみたいだ。

「皆、無事か？」

「全員何とかね。でも、」

鈴がそう言葉を濁したのには福音の変化にある。

「光の翼が生えてるな。」

「どうやらセカンド・シフトしたようだ。最悪のタイミングでな。」

ラウラは苦虫を噛み潰したような表情で告げてきた。

「なるほど、だけど、これ以上俺の大切な仲間達をやらせはしねぇ！！」

そう言って一夏は新しくなった白式を操り福音に挑んでいく。

「〜〜〜〜！！」

「おぉぉぉっ！！」

福音の光弾が無数に向かってくるが、新しい装備「雪羅」を使いエネルギー弾を消していく。

雪羅とは零落白夜の新たな形なのである。

（エネルギー消費が激しいけどこれを使えば福音の攻撃は通用しない！）

福音に実弾装備がないのは確認済みだ。

「食らえっ！」

だが、回避能力の高さは未だ健在の様でミリ単位の正確さで零落白夜の刃を避けられてしまう。

「このぉっ！！」

皆はかなり消耗している。俺が何とかしないと。

福音の正確な攻撃を避けれるものは避け、無理な攻撃は雪羅で防ぎ、隙を突き零落白夜で斬り付ける。

（一夏が助けに来てくれた！）

危ないところを惚れている男に助けられて惚れ直さない女はいない。

箒は舞い上がりそうになるのを必死に抑え、自分も何か一夏の力になりたいと願った。

その時、

（これは！？）

紅椿のワンオフ・アビリティー「絢爛舞踏」がついに目覚めた。

（これで、一夏と共に戦える！）

新たな力を秘め、一夏の助けに向かう。

「～～～～！」

「・・・くっ！」

福音の無尽蔵とも言えるエネルギーの前に徐々に押されはじめる一夏。

（エネルギーは・・・残り3割！）

エネルギーもこの調子ではすぐに底をつく。その前に何とかして決着を着けないと！

「一夏！私の手を握れ！」

「箒？」

何故か箒がいきなり変なことを言い出した。

「説明は後だ早く！」

「お、おう・・・っく！」

箒に近づこうとしたが、福音が圧倒的な光弾の数でそれを阻む。

あまりの数の光弾の前に全員避けるので精一杯で誰もカバーに入る事が出来なかった。

「一夏！・・・何とかしろ！」

「そんな事言われても・・・っ！エネルギーが・・・」

本格的に追い詰められ焦り始めた一夏だったが、福音が急に別方向に向かって光弾を放ち始めた。

「何なんだ？」

その方向に目を向けると、一台のバイクが福音に向かって行くではないか！？

「アタックシールド！」

そのバイクに乗った何者かが叫ぶと、バイクの前方にシールドが張られ、

「オォォォォ！」

福音を撥ね飛ばした。

そして、その男は名乗った。

「仮面ライダー・・・ＢＬＡＣＫ！！！」

一夏達はその姿を見て、驚いた。

「仮面ライダー！？」

「バイクで空を飛んでる！？」

「無茶苦茶な奴だな。」

あまりにも常識はずれな登場の仕方に全員驚きを隠せなかった。

ＢＬＡＣＫＳＩＤＥ

（気配を追って来てみたが、どうやら見失ってしまったようだ。今は目の前のＩＳに集中しよう。）

ＢＬＡＣＫは空中での初めての実践にしては中々の強敵に当たった事を肌で感じていた。

「何故子供達をねらう？」

「～～～～！」

返ってきたのは人間が発しているとは思えない奇声と光弾つきの超高速の突進攻撃だった。

「ふん！」

ＢＬＡＣＫは光弾の弾道を見切り、突進もロールで完璧に回避してみせた。

「答えないか。ＩＳ使いには質問しても答えない奴が多い気がするな。」

そう軽口を叩いていると、一夏が話かけてきた。

「仮面ライダー！あのＩＳ、福音はどうも暴走しているみたいで、乗っている人を出来るだけ傷つけたくないんです。本当に申し訳ないんですけど、今回も手を貸してもらえないですか？」

「なるほど。よし分かった、手を貸そう。」

「ありがとうございます！」

「何か策がありそうだが期待していいのかな？」

挑発的に聞けば、

「もちろんです！」

気合いの入った良い返事が返ってきた。

その返事に満足しながら福音に向き直り、

「よし！行くぞ、福音！」

「～～～～！」

黒と銀の戦士がお互いに突撃する。

福音は全身の翼から光弾を放ち、逃げ道を塞ごうとした。お互い超高速での移動のため、福音はともかくロード・セクターはまともにぶつかれば一撃で沈むだろう。

「アタックシールド！」

だがＢＬＡＣＫは少しも怯まず、逆にスピードを上げて光弾を全て避け、

「スパークリングアタック！！」

「〜〜〜！！！」

福音がミリ単位の精度で避けようとしても、その動きを先読みされ攻撃が直撃する。

（！なんて悲しい目をしているんだ。この子は苦しんでいる。傷つけることを悲しみ、助けを求めている。）

福音の目を見てその心の内側を垣間見たＢＬＡＣＫは、

（これ以上この子を傷つけさせはしない！）

例えそれが心を持たない機械だとしても目の前で助けを求めている者を見過ごすことはできない。

「オオオォ！！！」

そう決めたＢＬＡＣＫに悲しみながらの攻撃を開始する福音。

「トォ！」

攻撃を上に避け、

「一夏君！！」

「はい！」

それと入れ替わりで突っ込んできたエネルギーを回復した一夏が零落白夜を発動させ福音に切りかかる。

「おおおぉ！」

瞬間加速も使っての奇襲である。避けれるはずはなかった。

普通なら。

「オオオォォォ！！」

「なっ！」

福音は両手両足の四点瞬間加速だけではかわせず、道連れ覚悟の特攻は生半可な攻撃では落とせないことを悟るとそれを補うため、自身に光弾をぶつけ限界を超えたスピードで一夏の決死の一撃を避けてみせた。

「〜〜〜〜！」

そしてすぐさま追撃をかける福音だが、

「「「「「させ（ん）（ない）（ないよ）！」」」」」

専用機持ち全員にカバーされたため断念。再度迎撃体勢になる。

「くそ！無茶苦茶な避け方しやがる！」

一夏は悔しがるが、

「大丈夫だ。あんな避け方は長くは続けられない。」
戦闘のプロであるラウラがそう言った。
「だな。良し、このまま一気に「待ってくれ。」仮面ライダー？」
「ここは任せてもらえないか？」
「急にどうしたんですか？」
シャルロットが尋ねる。
「あの子は悲しんでいる。その苦しみから解放してやりたいんだ。」
ＢＬＡＣＫは福音を解き放つためここは任せて欲しいと言った。
皆一様に考え込んでいたが、
「あたしはそれで良いわよ。」
鈴が真っ先に賛成してくれた。
「鈴！？いいのか？」
一夏が尋ねる。
「福音だって暴走してるだけ、乗ってる人にも罪は無いでしょうし、何よりどんな結末になろうとお互い傷つけあわなくちゃならないでしょ。だったら借りを返す意味でもここは素直に言うことを聞きま

しょ。」

その言葉に全員が考えた。確かにこのままでは破壊は出来るかもしれないが、心まで救うことは出来ないだろう。ならば何度も自分達を助けてくれた仮面ライダーにその望みを託してみようと。

「皆いいかな？」

一夏が聞くと全員頷いた。

「うん、仮面ライダー。あの人達を助けてあげてください。」

「ああ、君達の想い確かに受け取った！」

福音に向き直るＢＬＡＣＫ。その目に映るのは助けを求める一人のＩＳとその相棒。

「今助けてみせる！」

「ガアアァァ！！！」

福音は全身にエネルギーを纏いまるで自身が巨大なレーザーのようになり、今までの倍近い速さで飛び込んできた。

「ふん！」

それを持ち前の反射神経で見切るＢＬＡＣＫ。しかし、すぐさまこちらに向かってくる福音、切り返しの速さも上がっている。

「〜〜〜〜！！！」

「トァ！」

ＢＬＡＣＫは攻撃を避け、なんとロード・セクターを足場にさらに高く飛び上がった。

「あれでは避けられない！」

「ライダー！！」

福音も当然止めを刺そうと追いかける。

だが、

（この力は誰かを救うためにある。ならば、限界すら超えてみせる！あの子を救うために！！）

すでにＢＬＡＣＫは最後の一撃を放っていた。

「オオオっ！ライダーパワーフラッシュ！！！」

ＢＬＡＣＫから太陽のように力強い光が放たれた。

「ギ、ギ・・・」

福音の全身からエネルギーが消え、操縦者が落下するが、

「終わったか。」

ＢＬＡＣＫが受け止めた。
こうして福音事件は解決した。

「じゃあ福音の操縦者の事は頼んだよ。」
「はい。任せて下さい。」
事件が終わり引き渡しも済み、後は別れるだけである。その前に、
「箒ちゃん・・・だっけ？聞きたいことがあるんだけど。」
「は、はい！何でしょうか！？」
だいぶ緊張しながら反応された。
「そのＩＳ専用機だよね。前に見たときは訓練機だったけど何かあったのかな？」
「今日、姉から渡されました。それがどうかしましたか？」
「いや、ちょっと気になっただけだよ。・・・気を付けた方が良い。それを狙ってくる奴は多いだろうから。」
「ご、ご忠告ありがとうございます！」

その返事に頷きで返したＢＬＡＣＫは何処かへと去って行った。

（箒ちゃんのＩＳが無ければ彼らだけで福音を倒すのは難しかった筈だ。渡された当日に都合良くあんな事件が起こるのだろうか。それにあの殺気の持ち主はいったい何者なんだ？）

今回の事件には何か裏がありそうだが、まずはあの殺気の持ち主である。

（嫌な予感がする。）

そう遠くない日にあるだろう激戦に武者震いするＢＬＡＣＫであった。

ＢＬＡＣＫ達が福音と戦った場所からそう離れていない孤島に何者かがいた。そう、あのＢＬＡＣＫにでさえ気付かれずに。

「・・・」
その者は何も言わず踵を返した。
その時木々の隙間から差し込んだ月の光でその姿が現れた。
それは福音の鮮やかな銀色とは異なり、月の淡い光と闇夜を取り込み、太陽の恵みを拒絶する異質の銀だった。
何者かはそのまま立ち去った。
・・・カチッ、カチッ、カチッ
不気味な足音を立てながら。

新たなＩＳ紅椿！迫る福音！そして・・・（後書き）

次回どうしよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1527q/

仮面ライダーBLACK ISに介入

2011年8月30日06時04分発行